

いま何故 ワーク・ライフ・バランスか

妻が病気になったのを機に子ども3人の世話を含めて、家事全般をこなしながら仕事をする生活を続けてこられた佐々木常夫さん。効率よく時間を使うことで、仕事のうえでも多くの成果をあげてこられた佐々木さんにワーク・ライフ・バランスについてお聞きしました。



●佐々木常夫さん プロフィール

1969年東大経済学部卒業、同年東入社。自閉症の長男に続き、年子の次男、年子の長女が誕生。妻が肝臓病で何回かの入院を繰り返す中うつ病を併発。会社では破綻会社の再建やさまざまな事業改革などに全力で取り組む。その実績が認められ、2001年同期トップで取締役就任、2003年より株式会社東レ経営研究所社長。

私はWAVE出版から『ビッグツリー—私は仕事も家族も決してあきらめない』という本を出した。それは次のような書き出しで始まる。

「神様は私に試練を与えたというか、ちょっといたずらをされたようだ。私の長男は自閉症という障害を持って生まれ小さい頃から手がかかり、私は幾度となく学校へ行かなければならなかった。また私の妻は肝硬変のため何度も入院を余儀なくされ、そのため妻としての役目を果たしていないという自分への責めや障害の長男のことなどが原因で、うつ病を併発してしまい入院は40回を超え3度の自殺未遂まで引き起こしてしまった。一方、会社では、まるで私の力を試すかのように転勤が繰り返され、東京と大阪を6度も異動したものである」

今から20年前最初に妻が3年ほど入院したとき子どもたちは中学2年、小学6年、5年であった。普段は毎朝5時半に起き3人分の子どもの朝食と弁当を作り、人より1時間早く会社に出社し、まなじりを決めて仕事をし、子どもたちの夕食のため夕方6時に会社を出る。休日は一週間分の洗濯、掃除、買物をし、病院へ見舞いに行く。会社では会議は半減、資料はシンプルにし事前配布、不要な業務の切捨てなど極限までの業務の効率化に挑戦してきた。

私は家族の障害と病気のため、自分の時間を確保しなくてはならなかったがそれは誰でも一緒である。本を読んだり人に会ったり自己啓発の勉強をしたり自分の時間が欲しいものだ。いわゆるワーク・ライフ・バランスが求められる。

何故いまワーク・ライフ・バランスなのかというと、ひとつは長時間労働で肉体的にも精神的にも疲れ切っていると仕事の満足感や会社への信頼感が低下する。そのような人たちの集団が、この厳しい競争社会で勝ち抜けない。

二つ目は、限られた時間の中では、おのずと計画的にまた効率的に業務遂行をせざるを得ないため生産性が向上する。

そして三つ目は、働きやすい会社という評価や評判はすぐれた若い人たちの入社を誘うし、社内で育った人材には帰属意識の醸成につながり定着率も高くなるという効果がある。

そういう意味でワーク・ライフ・バランスというのはすぐれて重要な経営戦略といえる。

ただ私の場合は、時間の使い方を極限まで追求したという意味で「ライフワークマネジメント」と呼んでいる。



男性も育児が当り前の社内風土



男性の育児休業取得を促すために休業期間の一部有給化が効を奏して、これまでに23人の男性が育児休業を取得しているハウス食品株式会社。人事部で社内の両立支援制度づくりに携わり、ご自身も1年前に育児休業を取得した福原祐樹さんにお聞きしました。

2006年に第1号の男性育児休業取得者が生まれてから2009年12月までに23人が取得しました。人数は増えているものの取得日数といえば長くて13日間と女性に比べるとまだまだ短いです。しかし、育児休業を取得する男性が増えたことは、確実に社内の意識を変えています。

育児休業以外でも、子どもが病気だからと、休みをとる男性社員がいたり、また、朝会社に来たら「今日は保育園のお迎えに行くので早く帰ります」と言う人がいると、周囲も配慮して残業にならないように協力する雰囲気生まれています。昼休みには、男性社員同士で子育ての情報交換で会話が盛り上がるなど、男性も育児参加するのが当り前といった社内風土ができつつあると感じています。

私自身、休業期間中には育児の大変さを実感したので、たとえ妻が専業主婦でもまかせっきりにははいけないと思いました。育児にかかわる時間を作るために、無駄な

仕事を減らしたり、効率的に進める工夫などで時間の使い方が変わりました。これまでのやり方を見直すと仕事上の提案でも新たな視点に気づいたり、周囲への配慮でコミュニケーション力が向上するといったことも、プラスになっていると感じています。



●ハウス食品株式会社 (東大阪市御厨栄町1丁目5番7号)
「次世代育成支援対策推進法」に基づき、育児援助制度の充実や有給休暇の取得促進、育児支援施策の周知等により、仕事と家庭の両立支援に取り組み、2007年に次世代認定マーク「くるみん」を取得。

●くるみん
次世代育成支援対策推進法にもとづく取り組みで一定の基準を満たした認定企業が広告や商品に使用できるマーク



男子もつくる弁当なり

最近、自分でお弁当をつくって職場に持っていく男性が増えています。健康志向や節約志向が背景にあると言われてはいますが、男性向けの料理本も多数出版されるなど、「男子厨房に入る」は普通のことになってきています。そんな男性の一人、東大阪市役所の藤島恵さんをご紹介します。



◆お弁当はいつからつくり始めたのですか？

高校生の時からです。大学4年間、社会人になってからも、ほぼ毎日作っています。

◆家族と住んでいて、自分でお弁当を？

両親が共働きで、家事は手の空いている者がするという家庭だったので。母親の帰りが遅いときなどは、兄妹で晩ご飯の支度をしていましたから、自然にお弁当も自分で作るようになりました。

◆高校生の男の子に、料理は難しくなかったですか？

うちは4人兄妹で、一番上の姉とは15歳違いますが、その姉に中学生の頃から料理を教えられました。

◆お弁当の定番メニューは、ありますか？

朝から揚げ物は、時間がかかるので、焼き物と煮物が多いですね。和食が中心です。野菜とこんにゃくと豚バラの煮込みとか。圧力鍋を使うから、早いですよ。

◆結婚されたそうですが妻の分も作られるのですか？

妻は職場に社員食堂があるので、自分の分だけです。妻は帰りが遅いので、スーパーに寄って帰って、晩ご飯の準備をします。そのときに、お弁当の下準備もさせておきます。

◆じゃあ、掃除などもされるのですか？

しますよ。換気扇は得意です。子どもの頃から、父親が当り前のように洗濯などをするのを見て育ちましたから、家事は女性がするものという意識がないのです。家事は、できる人がすればいいと思っています。